

ジョージ・ムア

A Translation of Virginia Woolf's "George Moore" (1940)
from *The Death of the Moth and Other Essays* (1942)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2015年9月30日受理

手に入れなくちゃいけない批評というのは目下のところ、文字に書かれたものではなく、口頭で述べられたもの。幾人かでワインやコーヒーを飲みながら、夜遅くに口頭で述べられたもの。編集者がくれる稿料や友人たちの思惑などなど気にすることもなく、ことばをみなまで言う暇も与えられず、行きずりの人の口からふとしたはずみで飛び出してきたもの。そういうものです。今活躍中の作家については、こうしたおしゃべりたちの批評(これが人を引きつけるところなんです)というのはいつだってはなはだしく食い違っています。たとえばジョージ・ムアを取り上げてみましょう。ムアは現在活躍中のもっとも優れた小説家です。ひょっとすると最悪かも。この時代のもっとも美しい、ひょっとすると一番覇気のない散文を書きます。文学への熱情をもっています。それは辛気くさいお偉方たち、今の作家たちのだれも持ち得ない資質です。でもムアの判断力はなんとむら気な、なんとバランスを欠いたものでしょう。おまけにこどもっぽく、手前勝手。そうしてその判断力がいわば蹄鉄を叩き出すのです。火花が飛び散る。飛び交う批評はその一打一打の正確さというよりはそれが産み出す熱に、そしてそれが新たに気づかせる意味にその価値があるのです。そうしてジョージ・ムアのこととかその作品とかが最高の意味を持ってくるのです。わたしたちはつぎの一打を待つまでもなくそう決めなくてはならないのです。

ハイネマン社出版の『祝福と別れ』〔訳注：Hail and Farewell 1914。1911年のダブリン滞在時についての三部作の回想記〕という作品の新しい厳かな形式を味わってみたいと思わせるのは、偶然というだけではきっとありません。その前に出版された『エステル・ウォーターズ』〔訳注：Esther Waters 1894〕、『イーブリン・インネス』〔訳注：Evelyn Innes 1898〕、『湖』〔訳注：The Lake 1905〕の世界に浸り、時間をゆっくり過ごしたというおぼろげな記憶があるからなのです。『祝福と別れ』はムアが自分自身のことをあからさまにそして赤裸々に書いた二巻本の大作です。ということ言うのもムアの小説は作者自身のことを包み隠しながら遠回

しに書いているからです。それで少なくとも回想録を読めば読者も納得するというもの。それに小説などの作品は虚構の風味に彩られている水も、ここ回想録の中ではきれいな水となり、そこに読者は身を浸す。そうして物語の方もよく理解できるというもの。でも物語というものはみな作者自身のことを語るのではないかと尋ねたくなるかもしれません。読者が物語の中の人々を見ることができるのは、ただただ作者が登場人物を見るのと同様にしか見るできないということ。作者の境遇がその視野を彩り、その偏屈な考えがその視野を形作る。そしてわたしたちが見ているものは物体そのものではなくって行く。そうしてわたしたちが見ている物体とそれを見る人はどう分ければ良いのかさえも分からないくらいに絡み合ってしまう。もちろん程度というものがあります。偉大な小説家というものは強い確信を持って感じ、見て、信ずる。するとその信念を作家自身の外へと放り投げる。それはそれ自身で飛び出してゆき、その信念自体の生命をもって生きはじめるのです。そうしてナターシャや、ピエールや、レビン〔訳注：トルストイの作品の登場人物〕という登場人物ができあがるのです。もうトルストイが生み出したものなんかではありません。もちろんムア氏もナターシャのような人物を作り上げます。彼女は魅力的で、とんまで、かわいらしい。でもその美しさ、とんまぶり、魅力は彼女自身のものではありません、作者ムア氏のものなのです。彼女の資質はみな作者のことを明らかにしています。言い換えると、ムア氏はものごとを劇的に表現する力を全くもって欠いているのです。『エステル・ウォーターズ』も見かけは偉大な小説です。誠実な表現もあれば、バランスも取れ、品も備わっている。他を抜きこんでる真剣さと高潔さもある。でもムア氏には主人公のエステルを自分から引き離して描き出す力がないので、彼女のよきは支柱の折れたテントみたいに周りに崩れ落ちているのです。そうしてその小説はそこそこに存在するのです。エステルという主人公のいない物語が。物語の大部分はジョージ・ムア氏自身です。すてきな言語の残骸、それ

からサセックスの丘陵のすばらしい描写。というのも物語を劇的に描くことができない、内部に燃えたる信念を持たない小説家なんて、支えになってくれるのは自然描写なのです。自然が作家の力を高めてくれるのです。物語の雰囲気壊すことなく、高めてくれるのです。

でも小説家の欠陥はすなわちその兄、自叙伝作家の栄光でもあります。そして嬉しいことにムア氏の小説を弱めている資質はその伝記作家の記憶力を作り出しているものなのです。この複雑な性格、自信がないと同時に主張の激しい性格、女物のハイヒールのブーツを履いて狩りに出かける狩猟家、その大切な馬よりも文学が好きなアマの騎手、手練手管に疎い色事師、精神修養に身を任せている好色家、この複雑で安定しない人物は、詰まるところ、スタミナも壮観さもごまかしも無いのに従順さと悪意と、抜け目のなさや無能を併せ持って、あまりにも多くの相反する要素で成り立っていて、偉大な芸術家という珠玉へと結晶することができなかったのです。そして他人の気まぐれを事細かに書くよりは自分自身の気まぐれを探ることに心奪われているのです。たとえばムア氏にはわたしたちが将来を予想したり、ものごとを作り上げたりするものとなる自分自身へのしっかりとした信頼がありません。これほど自信に欠けた人物もいないでしょう。子供の頃にはブスの年増しか結婚してくれないだろうと言われてたそうです。そしてそのことばを覆すことはできません(訳注：Mooreには長年の愛人がいたが、結婚はしなかった。愛人はCraigie夫人で、Mooreより15歳若かった)。「なんと言っても自分が何かの役に立つなどということに信ずることは、ぼくにはできなかった。たいてい大げさなことを言って、大人には手に負えないといった態度を取ってはいたがそうした見せかけの衣装を着て、本当は生け垣に隠れるミソサザイか壁板沿いに走り回るネズミのように心を恐怖に震えさせていた」。どんな小さな音にもムア氏はびっくりしました。あるいは人間の普通の行動もムア氏には驚きと動揺なのです。人々が生きる通りにはたくさんの名前が付いています。人々が着る上着にはたくさんのボタンが付いています。普通の生活のあれやこれやはムア氏の理解を超えているのです。でもネズミの臆病さとともに巨人の大胆さも持ち合わせています。このおとなしい灰色の生物はライオンのかぎ爪の脚も踏んでいくのです。ムア氏が口にしないことは何もありません。その語る場所によると、ムア氏はサウス・ケンジントン〔訳注：19世紀中頃から開発された博物館や高級ショッピング街のあるハイソなところ〕のどの客間からも閉め出されることとなりました。友人がムア氏を許すとなると、ムア氏にとっては、すべてのことが許されることになりました。小さい頃、「子供時代の退屈さを破ろうという制御しがたい欲求に駆り立てられて」、ムア氏は

服をサンザシの茂みに全部脱ぎ捨てて、「乳母兼家庭教師の前を、自分が引き起こした乳母の困惑に嬉しくなって大声を出しながら裸で走り回った」のでした。その癖はずっとついて回りました。ムア氏は服を脱ぐ(訳注：イギリスの19世紀は「上品さ」を追い求めた時代で、性的なものをことのほか排除した。ピアノの「脚」にストッキングを穿かせたという伝説もこの時代のもの)のが好きで、もう歳を取った例の家庭教師、つまりそいつは英国大衆だ、の前で声を上げながら走り回り、自分が引き起こした騒動と赤面と困惑とに喜んでいたので。しかしムア氏のその奇妙な行動は、腕白で恥知らずなものではありませんが、とても面白くとても優雅なものでもありましたので、さすがの家庭教師も木陰に隠れて見ていたこともあったとムア氏は書いています。ムア氏の叫び声、それは巢の中でさえずる小鳥たちのうるさい鳴き声と同じ、は楽しい音に表現されています。それにムア氏は、黄昏が降り、星が出てくると、長音をきれいな響きで響かせて描き出します。いつだってムア氏は夕方に出できます。その時間、丘陵は銀の波に隠れてゆき、アイルランドの灰色の畑地はアイルランドの灰色の丘と混じり合っていきます。ムア氏の本の中では、嵐がやってくることはありません。雷がムア氏の車の中で音を立てることはありません。雨がムア氏をずぶ濡れにすることもなく、そんなことはありません。ムア氏に降りかかるもので最悪なものはせいぜい、テレサがモデレーターランプ(訳注：19世紀に流行ったオイルランプ)に十分油を足していなかったということくらい。そのため庭のリンゴの樹の下でパーティを開いていた客たちが食堂へと場所を変えなくてはならなかったことくらい。そこには、オズボーン氏、ヒューズ氏、ロングワース氏、スーマス・オサリバン氏、アトキンソン氏、イエイツ氏(訳注：いずれも当時のアイルランドの文壇の作家や編集者たち)が客たちを待ち受けているのです。

そうして食堂に入るとムア氏は腰を下ろし、友人たちに葉巻を勧め、長たらしいお話の糸口をまた取り上げる。その手の話はたとえ一時沈黙の淵に落ち込むことがあっても、ムア氏が長椅子だのを見つけて座れば、また始まるのです。あるいは友人と腕を組めば、あるいは時折鳴き声も立てずに前足を上げ慎重深く気持を通わせることのできる動物を見つけることができれば、また始まる。ムア氏は止めどなく本のこと、政治のことをしゃべるのです。チェルシー通りで思い浮かんだ夢、コールビル氏がサセックスの丘陵でベルジャンヘーア(訳注：食肉用の大型ウサギ)を増やしていること、飼い猫の死のこと、ローマカトリック教のこと、キリスト教の教義は文学の死であること、詩人の名前はその詩を決定づけること、イエイツ氏はカラスに似ていること、そうしたことを止めどなくしゃべり続けます。そうして自分はいえ、パジャマ姿で窓枠に腰を下

ろしているということになるのです。ひとつの話からつぎの話へ、今のことを話していると過去のことが生まれ出てきます。それは香り立つ葉巻の煙のようにころころと転がり出て、どうでもいいことで、耳に心地よい。でももっと注意して耳を傾けると、葉巻の煙が空中に吐き出されるのと同じくらい簡単にお話が浮かび上がってきて、その青い煙が輪っかとなって今まで思ってもいなかったような意味を持ってくるということに気づくのです。それは分散することなく、まとまってきます。空中に、生涯という小部屋を造る。テンプル・ガーデンで、イーバリー通りで、パリで、ダブリンで、ムア氏の言葉に耳を傾けていますと、最初から最後まで、アイルランドの初期の時代からロンドンのここ最近のことまで、ムア氏の魂の住処を探検することになるのです。

ここで、ムア氏自身の基準をその作品にあてはめてみましょう。自分の心を引きつけるものは、とムア氏は言います、ひとりの男が書く三つか四つの美しい詩ではない。その世界にその男がもたらす心だと。そして「心ということばは新しい感じ方、新しいものの見方を示している」。話という潮が荒れ狂い、もう一度ムア氏の作品という城壁を洗う時、流れの中につぎのことばを投げ入れてみましょう：ムア氏の小説にはひとつとして傑作はありません、それらは支柱のない絹製のテントです、しかしムア氏はこの世界に新しい心をも

たらしめました。新しいものの見方、感じ方を示してくれました。ムア氏は一非常な骨折りで、というのもムア氏は何にもまして労を惜しまないのです、巧妙な才能を、骨を折って手に入れたのです—自分自身の気まぐれで揮発しやすいエッセンスを液化し、こうした回顧録という瓶に詰め直す手段を考え出したのです。そして程度がどうであれ、それは勝利であり、実績であり、不朽の名声というわけなのです。さらにもしそれがどの程度かを決めようとするれば、こういうことになります。ムア氏ほど根っからの文学者はいなかった。ムア氏こそ偉大な作家の一人なのです。文学はムア氏の周りにベールのように絡みつき、手脚の自由を妨げています。ことばが感情よりも先に浮かび上がるのです。しかしこう付け加えなければなりません、それでもムア氏は生まれながらの作家だと。食事を、召使いを、安楽を、尊敬に値すべき態度を、そして自分と芸術の間に立ちただかるものすべてを嫌った男なのだと。同じ時代の作家の大部分がずっと前になくした自由というものを持ち続けた男だと。恥ずかしがることだけを恥じた男だと。自分の心の中にあることだけを口にした男だと。強勢や韻律をつまりは言語を独学した男だと。それはイングリッシュではなくアイリッシュではありましたが、われわれの言語の不朽の人物たち、その一流ではないとしても、その中にムア氏を据えることにはなるでしょう。